

## は　じ　め　に

昭和60年度は、衛生研究所としては新しい時代への対応の第1歩を踏み出した年であると言えましょう。

第1には、長年の懸案であった実験動物棟の増築と現在の動物育成舎の改修が、多くの方々の努力と道当局のご理解により実現の運びとなり、工事がスタートした事であります。最近の研究、特に衛生研究所が対象とする研究分野の中での動物実験の持つ意義は非常に重要であるが、その実験動物及び施設に対しては、GLP基準とかバイオハザード対策等の問題が提起されており、これらの問題への対応がなされないまままでの動物実験は困難であるばかりでなく、意味のないものとされる時代であり、それらが配慮された施設が完成される目途がついた事は、今後の研究成果に大きな期待が持てるわけで、誠に喜ばしい限りであります。

第2には、道立試験研究機関相互の共同研究に対し別枠の予算措置がなされ、当研究所が主体となる2課題と、協力する2課題の計4課題についての共同研究が、年度途中からではあるがスタートし、何れも当所の担当研究者が、持てる能力と機能を充分に発揮し、着々と成果をあげている事であります。

勿論、当所には、前年度からスタートしたエキノコックスに関する研究課題と道産植物の有効利用に関する研究課題を中心に、衛生行政上必要とする衛生研究所独自の研究課題もあるが、これとは別に、単独の機関ではなし得ない研究を縦割りの道立試験研究機関の横の相互協力によって進展させようという道当局の施策によるものであります。

そもそも、道立試験研究機関の強化と相互協力に関しては、昭和33年に当時の北海道科学技術審議会会長・杉野目晴貞北海道大学学長から田中敏文北海道知事に対し意見書を提出し、会長自ら知事に説明された事が、初代中村豊所長の昭和33年11月発刊の所報第10集の題言の中にみられるところであります。以来幾多の変遷を経て、財政的に多難な時期であるにもかかわらず、共同研究に対する予算措置をされた事は、知事の試験研究機関を充分に活用し、科学技術振興と試験研究を通して、本道の経済、産業、文化水準の向上発展を図ろうとする考えによるものであり、調査研究を志す科学者にとって大きな鼓舞であり、道立試験研究機関の新しい時代への対応のあり方を方向付けしたものとも思われます。試験・検査に追われていた時代と比べて、現在在籍する研究職員にとってこんな幸せな事はありません。行政機関の研究者として何を為すべきかを熟慮し、大いに奮起される事を望みたい。

さて、この1年間には、輸入ワイン、化粧品、LL牛乳などの突発的な試験検査業務もあったが、その都度担当研究職員の方々が、適切に対処されていた事に対し、改めて敬意を表する次第であります。元来、衛生研究所の業務は、物を生産する事ではなく、有害物質や有効成分を夫々の法令や規則によりチェックする事であります、そのため全国的に統一された試験法として指示される方法、特に新しい化学物質の試験法には問題点の多い事もあり、今回のワインの例でもみられるように、日常の試験研究を通しての研究職員の取り組み方如何によっては更に改良された方法が適用でき

るわけで、最近ではCNPやブタクロールの試験法も含め問題点をいくつか指摘する等、試験研究機関の研究職員として当然の事とは言え、当所研究職員の真摯な探究姿勢に敬意を表すると共に、今後、更に研鑽されることを希望する次第であります。

人事については、定年制施行の初年度という事もあって、別記のように多くの職員の異動がありました。これら異動とは別に、当研究所の設立時から20年6ヶ月勤務され、昭和45年9月北海道大学医学部教授に就任された飯田広夫元副所長も年度末に北海道大学を定年退官されました。飯田先生は、日本で初めてボツリヌス中毒の存在とその予防及び抗毒素血清療法についての研究を衛生研究所で多くの研究者と共に進行ない、北海道立衛生研究所の名を全国は勿論、外国にまで高められた方であり、地方衛生研究所が、試験検査だけでなく、調査研究を行うべきであり、またその能力のある事を立証された先駆者とも言えます。現役を退りぞかれた年度でもあり、ここに記し、先生の業績の偉大さを改めてたたえ、後世に伝える事とします。

一方、疫学部・古屋宏二研究職員は、4月から1年間、そして、前年度の疫学部・高橋健一研究職員に次いで薬学部・中野道晴研究職員が道職員外国派遣研修の機会を与えられた。これら若手研究職員の外国での研究、研修の機会は、本人にとっても勿論、当所にとっても業務の一層の活性化が期待されるところで、誠に喜ばしい限りであります。

以上、昭和60年度の当衛生研究所の動向の一端を述べたが、各研究職員が意欲的に行なってきた調査・研究の成果を第36集としてここにお届けします。所報が年1回の発刊という事もあって、その成果の多くが各学会誌に寄せられている事は、現段階では止むを得ないところであり、本所報に含まれている他誌発表論文及び学会報告も合わせて、この1年間当研究所の果たした役割の学問的記録として評価をいただくと共に忌憚のないご指摘、ご教示を頂くことができれば幸いと存じます。

昭和61年8月

北海道立衛生研究所長 熊 谷 滿